

## 松田静心の境い目

昨年、建築家で彫刻家でもある、ある作家の展覧会に行った。

拾ってきた流木に、少し手を加えた小さな作品群が所狭しと並んでいた。

思わず「自由奔放、天真爛漫でいいですね」と声をかけた。

作家は、突然怒りだした。「天真爛漫とは何だ。長い蓄積と深い思念のもとに、緻密な計算で作っている。いかにも遊んでみたいじゃないか。軽々に物を言うな」

「寧ろ、そうした積み重ねがあってこそその天真爛漫ではないか。それが、見る人の心を和ませる。

ちょこっとした工作物でない芸術の力だ」と言い足したものの、怒りはおさまらない。

「所詮、年老いた売れない建築家の童心に帰った手遊び（てすさび）じゃないか」と捨て台詞を吐きたかったが、すんでのところ、出かけた言葉をのみこんだ。

松田静心さんの作品に初めて出会ったのは、2010年、銀座のギャラリーだった。

確か、「hito シリーズ」「INochi シリーズ」だったと思う。

現代作家の作品には、シニカルな鑑賞をしがちな私だが、妙に惹かれるものがあり、立ち去り難かった。

何せ、色がいい。聞けば、出身地桜島の火山灰を使っているという。（行く先々の土地の土を使って泥絵風な絵を描いている作家もいるが……）

色と色を隔てる境い目がいい。あの境い目の折れ線は自由奔放、天真爛漫のなせる技なのかそれとも緻密な計算の結果なのか？

世の中至る所、境い目だらけだ、民族、宗教、言語、男女、貧富、文化など、いくらサイバー空間が広がり、グローバリズムを実現しても境い目は残る。

としたら、境い目のこちらとあちらで、それぞれ大いに個性を発揮して成長・成熟していく、そして新たなる調和を目指していく。その有様を境い目の上に立って、見てみたいという思いに駆られた。

松田さんによると「あれは面と面との重なり合い、ぶつかり合い。桜島の火山灰が、発色性がいいことに気づいたので、とことん原色にこだわってみた。あの折れ線状のものは、面と面を合わせた時、出てくる。その時の気分で、バランスを見ながら修正した。断じて、直線や曲線ではないと思った。いつも無心で描いている。それ程深い意識はなかったが、言われてみれば、そういう見方もあるのかと思った」とのこと。必ずしも、自由奔放、天真爛漫、緻密な計算というわけでもなかったようだ。

松田さんの「色と面と折れ線」のシリーズは「色の行方」「Color of Life, and being」「Water Sky」と深化していくが、2019年には新たな進化を見せる。

「アートとイート」「パイナップルソーダ」「パスタコ」「キャンディポップ」「レインボーキャンディ」「レッドキャンディ」「ブルーキャンディ」のシリーズが出現した。

これは、一体何だ？

色づかいは、より淡く精妙になった。白が前面に出るようで、出ない、この奥ゆかしさがいい。だが、あの折れ線がない。

太く手書き風の直線が画面を分断（境目）している。

日常生活の中に潜むちょっとした分断をテーマにしていると言う。

時代の気分は、モヤモヤ、アイマイモコとしている。何かと何かのアワイは、原色やシャープな線では表せない。日本画の画材、水干、胡粉、箔などを使い、あまり主張しない強さを表現したのではないか。

そして今、2年ぶりの個展が開催される。コロナ禍、ウクライナ侵攻がおさまらない中、松田さんはどんな境目を提示してくれるのだろうか？

日常なのか、環境なのか、パンデミックなのか、戦争なのか、宗教なのか、芸術（音楽）なのか、文学なのか……。

こちらとあちらの、研ぎ澄まされた原色と、それを分ける自由奔放で天真爛漫な線を見てみたい気がする。

複雑な折れ線じゃなくてもいいじゃないか。柔らかな曲線でも、明快な直線でもいい。

そのほうが、境目は単純になり、世界は平和になる。

2023年1月13日

広告とアートのアドバイザー

若林 覚

元・サントリー宣伝部長 サン・アド社長

サントリー美術館副館長・支配人

元・練馬区立美術館館長